The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ジョン・ハイアム著、斎藤眞・阿部齋・古矢旬訳『自由の女神のもとへ　移民とエスニシティ』（平凡社、1994年）
Author(s)	北, 美幸
Citation	大阪外国語大学アジア太平洋論叢. 1998, 8, p. 275-280
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99919
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〔書評〕

ジョン・ハイアム著、斎藤眞・阿部齋・古矢旬訳『自由の女神のもとへ　移民とエスニシティ』

（平凡社、1994年）

北　　美　幸*

本書は、John Higham, *Send These to Me: Immigrants in Urban America* (Revised ed. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1984) の邦訳である。ハイアムは移民史研究の大家であり、その優れた著作が「日本語版への覚え書き」や議論をよりアップ・トゥ・デートにするための書き換えを伴って翻訳・出版されたことを喜びたい。本訳書の構成は以下の通りである。

第1章　アメリカ史における移民
第2章　移民制限の政治的背景
第3章　＜自由の女神＞像の変容
第4章　＜金ぴか時代＞のイデオロギー的反ユダヤ主義
第5章　社会的差別の開始
第6章　反ユダヤ主義とアメリカの文化
第7章　現代アメリカ思想における民族多元主義
第8章　もう一つのアメリカのジレンマ
第9章　アメリカにおけるエスニック・アイデンティティ

まず、全体の内容を概観したい。評者の判断では、全体は第1章～第3章、第4章～第6章、第7章～第9章の三つの部分に区分できると考えられる。まず、第1章から第3章は、アメリカ合衆国における移民全般に関する論考である。特に第2章は、移民制限の歴史に関して1870年代から1990年代初頭に至るまでを詳

＊九州大学大学院　比較社会文化研究科　国際社会文化専攻　博士課程在学中

しく述べている。また第3章は、今でこそ移民に対する寛容のシンボルとして取り扱われる自由の女神像が、その意味づけを獲得するまでの長い過程を描いている。原著のタイトル Send These to Me はこの像の台座に彫られたエマ・ラザルスのソネット「新たなる巨像」の一部分である。

第4章から第6章は、合衆国における反ユダヤ主義の発生と展開を主題としている。ハイアムは、形成期にあった19世紀末の反ユダヤ主義をイデオロギー的反ユダヤ主義と社会的反ユダヤ主義に分類し、第4章で前者を、第5章で後者を分析する。また第6章において、都市文明の物質主義を嫌い「金銭や思想といった手ごたえのないものを操作するだけの人間」を低く評価する合衆国の農本主義的伝統が、反ユダヤ主義と密接に関連することを指摘している。

第7章から第9章は、合衆国におけるエスニック・グループの統合のあり方に考察を加えた理論的な部分である。ハイアムは、まず第7章でカレンやデュボイス、パークやゴードンの多元主義理念を整理する。その後、第8章において同化主義、多元主義それぞれが持つ欠点や非現実性を指摘した上で、エスニック集団の多様性と国家的統合を調和させる方法として有効であると自らが信ずる「多元的統合」のヴィジョンを提示している。

本書に収められた九編の論文は、いずれもが1870年代からその数が急激に増大した東欧からのユダヤ系移民の経験に幾分のアクセントを置きつつ論じられているが、このことは原著の初版（1975年）のサブタイトルが Jews and Other Immigrants in Urban America となっていることからも理解できよう。

合衆国におけるエスニック・グループの関係性のあり方に関しては、これまで、アングロ・コンフォーミティ、るつぼ論、文化的多元主義など多様なモデルが提示されてきた。それぞれ、合衆国は本質的にイギリス的要素が主流であり少数者集団がそれに順応していったとする見方、人種・民族的背景を異にする人々がるつぼの中で溶け合うように全く別の「アメリカ人」を形成するという見方、そして、各グループはそれぞれの特性を保持しつつ国としてのまとまりがあるサラダ・ボウルのようなものであるという見方と概括できよう。しかしながら、研究者の間では、それぞれの見方の中でも概念規定を巡っての解釈の違いや、術語の使い分けに関する混乱が生じている状態で、エスニシティの理論化は成功を収めたと

は言い難い。

ハイアムの場合、まず合衆国のエスニシティに対する考え方のパターンを同化主義と多元主義の二つに大別し、それぞれを現実にそぐわないうえに道義的にも好ましくないとして退ける。ハイアムはこの二つのイズムの根本的な区別を境界線の問題としている。すなわち、前者はエスニックの境界線の消滅を想定し、後者はその存続を信じている。確かに合衆国においては、文化的にも血縁的にも、完全に溶解してしまったエスニック集団もなければ全く元のままという集団もない。その点においてこれらは双方とも非現実的である。また、これらは集団と個人の関係において問題となる。同化主義は集団よりも個人に高い価値を与えるから、どうしても自らの出自を拒否し全面的な画一性・同質性を強調する傾向が生じる。逆に多元主義においては、集団への帰依の固定性が前提とされ、エスニック集団の固有性と団結のために個人が犠牲となる事態が生じえよう。以上のような点においてこれら二つの立場は対立し合うものである。

以上のようにそれぞれの理論の限界を示した上で、ハイアムはこれらのいずれとも異なる第三の戦略「多元的統合」を提示する。ハイアムの強調するものは、境界線の固定化・明確化ではないエスニックの文化的核の再発見と強化である。具体的には、エスニシティの強度は一人一人で大きく異なることに鑑み、エスニック集団の中心部では献身的・精力的なリーダーシップを保持・育成しつつ、周辺においては他集団との境界線の相互浸透を許そうという態度である。そうしてみると、この「多元的統合」は、各々の素材が部分的に溶け合う「たくさんの材料でできたシチュー」[1] にたとえられるかも知れない。るつぼのように各々の物質の特性を失って全く別のそして単一の物質へと融合するのでもなく、サラダのような単なる材料の取り合わせの上での調和でもない。ハイアムはこの中間的な案を（なんらかの完全に新しいモデルが出現するまでのという但し書きが付くとはいえ）「最も有望なアプローチ」として自信を持って提出する。そしてエスニックの核の重要性を強調して「多元的統合」のシステムを明確に概念化する。

1990年代に入り、合衆国では多文化主義（multiculturalism）という言葉がよく聞かれるようになった。最も激しい形でこの立場が主張されたのは教育の分野であり、特に「歴史記述においてこれまで無視されてきた諸集団のアメリカ史

（その他）への貢献を認め、カリキュラムを改訂せよ」という要求となって現れた。例えば、大学の必修科目である「西洋文明」に対する、それがヨーロッパ社会を中心とした白人（男性）の視点から描かれた偏ったものであるという、黒人学生団体等からの批判は多くの高等教育機関で観察された。さらには、これが白人（男性）的なものへの攻撃、アフリカの歴史・文化の過度の強調にエスカレートしている嫌いがあるゆえ、この言葉は現在では皮肉を込めて「アフリカ中心主義」と同意に使用されることがある。

ここで、この最近の状況にハイアムの「多元的統合」のヴィジョンを当てはめてみよう。そうすると「これまでの偏った教育により失われた黒人の誇りと自尊心を回復するには、黒人による黒人のための教育しかあり得ない」として、改めて分離された教育を黒人側から要求している状態などは、自らの殻に閉じこもろうとする、まさにエスニックの境界線の明確化に他ならない。ハイアムの理論は、現在の混乱したエスニック状況に対して、現状打破や今後の見通しをたてるという点で随分と有益な示唆を与えるのではなかろうか。

さて、ここで、評者の研究上の問題関心でもある合衆国における反ユダヤ主義を扱った部分に関して若干言及しておこうと思う。ハイアムは、これまで反ユダヤ主義がアメリカの歴史家に見過ごされてきたことを指摘した上で、その理由をアメリカ史学史の流れに関連づけて説明するが、革新主義的解釈と新自由主義的解釈のいずれにおいても反ユダヤ主義の検討が常に脇に置かれがちであったことを述べるその議論は極めて説得力に富む。また、ドイツ系のユダヤ人の急速な社会的・経済的上昇や東ヨーロッパ系のユダヤ人の大量移民との関わりの中で反ユダヤ主義が1870年代より発生・激化する過程が第５章で描かれているが、当時代の資料を使用した丁寧な考察は状況の具体的な理解を可能にする。

ハイアムは、アメリカの農本主義的伝統を（特にイデオロギー的）反ユダヤ主義の源泉と見るがゆえに、1950年代末から60年代初頭の急速な反ユダヤ主義の衰退の原因を、前世紀末からの急速な産業化・都市化の進展に起因する農本主義的異議申し立ての伝統の崩壊および20世紀初頭から存在した包括的な偏見の解体といった「アメリカ文化の変容」に求める。すなわち、生産者階級こそを尊いものと見なす風潮は銀行家や債権家を敵視するものであったから、まさにそれらのイ

メージで語られていたユダヤ人に対する差別・排斥感情も自動的に強くなったし、逆に都市に対する古くからの反感の消失や消費主義の興隆の中では反ユダヤ主義は後退したと見るのである。

しかしながら、実際的な差別・排斥の弛緩に関しては別のダイナミズムも大きく作用したのではなかろうかと評者は考える。例えば、医学校への入学に際しての反ユダヤ的差別は、それまで他の学部に比して最も厳しいものであったが、戦争時の医者不足により既に1943年頃までには減退していたとの指摘がある。[2] また、戦後の高等教育の急速な拡大に伴う伝統的私立大学と新興の巨大州立大学の間の学問的威信を求めての競合は、教員任用の際の反ユダヤ主義を後退させたと佐藤唯行は指摘している。[3] その他、教育の場面に限らずとも、冷戦や宇宙開発を巡るソ連との競合の激化も、「平等」の国アメリカを世界各国に強くアピールする必要性や実際的な人的資源の確保の必要性等から、それぞれの場面におけるエスニックな偏見を排したと推測できよう。このような、いわば「差別を行う余裕のなさ」が、少なくとも社会的差別の衰退には役割を果たしているように評者には思われる。以上のような事情が、ハイアムの言う「アメリカ文化の変容」と総合して語られるべきではなかろうか。

第6章において、ハイアムは反ユダヤ主義について「それ自体独自のかたちと意義をもつひとつの歴史的力」と記述し、歴史研究における反ユダヤ主義検討の重要性を認めている。また、第9章の最後では「ユダヤ人の物語は、同化の過程とエスニックの境界線の解消とが、あらかじめ決定されたものではないことを教えてくれた」として、ユダヤ系の研究が合衆国のエスニック理論の確立に果たす役割を示唆している。このような研究の意義付けに後学のひとりとして大いに勇気づけられ、アメリカ史の碩学ハイアムに改めて敬意を表したいと思う。

注

1　有賀貞『アメリカ論Ⅰ　北アメリカ』日本放送出版協会、1992年、34頁。

2　Marcia Graham Synnott, "Anti-Semitism and American Universities: Did Quotas Follow the Jews?" in D. A. Gerber ed., *Anti-Semitism in American History*. Chicago: University of Illinois Press, 1986, p.252.

3　佐藤唯行「合衆国の大学教員職の任用・昇任時におけるユダヤ人排斥－1930年代から

60年代－」『青山史学』第13号、1992年、180頁。

（付記）本稿は平成９年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部分である。

（この書評はH-NETから転載したものです。）